

タイトル:平成 27(2015)年度 教育セミナー(第 11 回)

日時:平成 27 年 9 月 21 日(月・祝)～24 日(木)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「カッザーフィー政権期リビアにおける部族政策—『緑の書』出版前後を中心に」

齋藤 秋生子 (上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻)

私は前年度の中東☆イスラーム教育セミナーにも受講生として参加している。その際には自分と同年代の大学院生が研究発表をしていることに非常に刺激を受け、「来年は自分も教育セミナーで発表をする」と、1 年後の目標として本セミナーでの研究発表を設定していた。今年度も先生方のご講義と受講生の発表のテーマは多岐に渡り、余裕のなさからリビアのことばかりに注目せざるを得ない私は、こんなに広い世界があったのかと改めて中東研究・イスラーム研究の層の厚さを感じさせられた。

私はセミナー最終日、「カッザーフィー政権期リビアにおける部族政策—『緑の書』出版前後を中心に—」というテーマで発表をさせていただいた。ここでは、1969 年にクーデタで政権を掌握した革命指導評議会、そしてその中心人物であるカッザーフィーが、リビアにおいて非常に根強い部族という単位をどのように排除しようとし、その政策が失敗したのちにどのように部族を利用する方向に転じていったかに関して 1970 年代を中心に説明を試みた。質疑応答の時間では、説明不足であった事柄、基礎的な語学能力の問題点、リサーチ・クエスチョンの不透明さ、資料の制約が厳しい中での立証の方法と研究の方向性、多層性を持つ部族をどのように規定するかなどに関して、先生方や受講生からたくさんのご指摘やアドバイスをいただいた。結果としては反省点がかなり残るものであったが、発表をするために研究を整理したこと、そしていただいたアドバイスは今年度末に提出する修士論文の内容に確実に活かせるものであった。また、研究対象が日本では研究の少ないリビアということから、発表内容に関わるリビアの地域的・歴史的背景をコンパクトに説明する練習になったことも非常にためになった。

普段の大学院ゼミでの発表では、出席者は私と同じく北アフリカ研究をしている大学院生が多く、またお互いにお互いの研究内容をざっとではあるが把握している。そのため自身の研究内容や研究地域を説明する機会に乏しく、ともすれば井の中の蛙になりかねない。本セミナーでは、いただいた質疑同様、研究内容の伝え方に関しても考えさせられた。

本セミナーでは前回同様、他の院生の発表や彼らとの交流、また先生方のご講義を通して新しい知見を得ることができた。しかし、今回は前回以上に「楽しかった」。それはおそらく自身がこれまでの大学院生活 1 年半で学んだことを(不完全な状態ではあるが)発表でき、それに対する質問や指摘、アドバイスをいただけたからだと思う。

最後になりますが、貴重な機会を与えていただき、そして私の拙い発表に関心を持って聞いてくださったスタッフの先生方、事務局の千葉様、そして受講生の皆様、本当にありがとうございました。